4

投票というケアのかたち

大久保凛乃

私が暮らす宮崎県では、高齢化が進み、医療や介護の問題を耳にすることが多い。ニュースで「看護師不足」「病院の統合」といった言葉を目にするたびに、将来看護師を目指す私にとって、それは遠い話ではなく、自分の未来に直結した現実のように感じられる。十八歳で初めて投票した経験を経て迎えた二度目の選挙では、前回よりも自分なりに「どんな社会を望むか」を考えながら投票に向き合うことができた。政治は、現場で命を支える看護の仕事とも深く関わっているのだと改めて感じている。

大学の授業で、地域医療について学んだ時のことが印象に残っている。医療体制を整えるためには、看護師や医師の努力だけでなく、国や自治体の支援、つまり「政治の決定」が欠かせないという話だった。どんなに優れた医療技術があっても、政治や予算がなければ現場は動かない。看護を学ぶ中で、初めて政治の仕組みが「誰かの命を支える裏側」にあるのだと実感した。

私の祖父母が住む地域では、救急車の到着までに時間がかかる場所もある。高齢者が多い地域では、夜中に体調を崩しても「迷惑をかけたくない」と救急要請をためらう人もいるという。こうした話を聞くたびに、医療の問題は単なる「病気」の問題ではなく、社会の仕組みそのものに関わることを感じる。看護師として人を支えるだけでなく、社会全体を「支える仕組み」を整えることが本当の意味での「ケア」なのかもしれないと思うようになった。

看護は、一人の患者さんに寄り添う仕事だが、選挙は社会全体に寄り添う行動だ。投票用紙に名前を書き、箱に入れた瞬間「自分もこの国のケアに関わっているのだ」と感じた。たとえ一票でも、誰かの暮らしを支える力になる。

若い世代は「政治に興味がない」と言われることがある。しかし、私たちが無関心でいる間にも、医療や福祉の制度は決まり、現場の環境が変わっていく。看護師不足の背景には、働く環境や給与の問題、夜勤の多さなど、政策が深く関わっている。そうした課題を変えていくには、現場の声を社会に伝える仕組みが必要である。もし政治が変われば、働く看護師の負担が減り、患者さんと向き合う時間を増やすことができるかもしれない。そう考えると、一票の重さは数字以上の意味を持っているように思える。

さらに、投票に行くだけで満足するのではなく、自分の経験や考えを周りに伝えることも大切だと思う。友人や家族と選挙や社会の課題について話すことで、政治や投票が身近な問題であることを知ってもらえる。私自身、初めて投票した時の戸惑いや二度目で感じた意識の変化を話すことで「若い世代の声も社会を変える力になる」ということを伝えら

れるかもしれない。例えば、SNS で自分が投票に行った経験や医療現場の課題について考えたことを共有することもできる。それにより、まだ投票に行ったことのない人たちが「自分も関わってみよう」と思うきっかけになるかもしれない。投票することは一人の行動だが、それを共有することは、より多くの人の意識を変え、地域や社会を支える力につながると感じている。

看護師として患者さんに寄り添うことと同じように、投票や政治参加も「人の生活や命に関わるケア」の一環だと考える。目の前の患者さんだけでなく、制度や政策の面から人々の暮らしを支えることも、広い意味での看護である。

看護を学ぶ私は、これから多くの人の命や生活に関わっていく。その中で、目の前の患者さんだけでなく、地域や社会の「健康」を守ることができる看護師になりたい。病気の治療だけでなく、制度や環境の面から人を支える視点を持ち続けたい。

選挙はその第一歩である。政治に関心を持つことは、他人事ではなく、誰かの苦しみを見過ごさないという意思表示でもある。

これからも私は、看護を通して人の心と体を支え、政治を通して社会全体を支えていきたい。看護と政治は一見違うようでいて、どちらも「人を支える」という点では同じだ。自分の手で誰かをケアするように、自分の一票で社会をケアしていく。そんな看護師になれるよう、これからも考え、行動していきたい。